

『満漢成語對待』校注(1)

竹越 孝

<はしがき>

本稿は、清代の満漢合璧教材の一つである『満漢成語對待』(Manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithe) について、現存の諸本を校合するとともに、満洲文字をローマ字に転写し、日本語で逐語訳を付した資料である。

『満漢成語對待』四巻は、満漢対訳形式を持つ満洲語教材としては最古のものと思われる。現存の諸版本及び歴史文献には、本書の作者及び成立・刊行年代に関する記載は見られないが、ドイツの文献学者 Walter Fuchs (1902-1979) は作者を劉順(?-1761)、出版年代を1702年(康熙41年)とする。Fuchs (1936: 80) の記述は以下の通り：

Eine alte Ausgabe hiervon besitzt die Peitang zu Peking und die Berliner Staatsbibliothek; sonst ohne alle bibliographischen Data, trägt das Titelblatt zwischen dem zweisprachigen Title de Angabe: 聽松樓梓行. Danach ist diese Ausgabe also von dem öfter erwähnten Liu Shun 劉順 gegen 1702 veröffentlicht worden.

『清史稿』、『國朝耆獻類徵初編』、『満漢名臣傳』等によると、劉順は順天の人、雍正5年(1727)の武進士、藍翎侍衛を授けられ陝西の防衛にあたる。乾隆13年(1748)、金川(現在の四川省阿壩藏族羌族自治州の南西部)の平定に功績があり、同24年(1759)に安西提督となるが、同26年(1761)12月には病没したという。劉順の卒年からすると、出版年を1702年と見るのは疑問であり、本書については作者・年代ともに確定的なことが言えない。なお、劉順の著作としては阿敦・桑格との共編になる満漢対訳辞書『廣彙全書』が知られ、康熙42年(1703)の金陵聽松樓刊本が伝わっている。

本書の解題としては、渡部薫太郎(1932: 5)が簡にして要を得ている。渡部氏は乾隆(1736-1795)中期の作とする：

本篇ノ原名ヲ「マンジウ、ニカン、イ、フエ、ギスン、ベ、ジョフヲホ、アツアブハ、ビトヘ」ト云フノデア。之ヲ譯スレバ「満漢舊話ヲ繼ギ合セタル書物」トノ意デア。序文アルモ年月及び著者ノ名モ書イテナイガ満文及び漢文ノ體ニヨリ著作年代ヲ推定セバ、乾隆中期ノモノト思ハル点多イ。

其内容ハ三百四十八種ノ簡潔ナル成語ヲ満洲語ニ譯シ、之ニ漢文ヲ其ノ側ニ附シ、對待即對譯トシテアル好讀本デア。四本ヲ十部ニ分チ、第一部強

亮四十九話、第二部不及三十九話、第三部良善十七話、第四部凶惡十五話、第五部高貴十七話、第六部下賤十八話、第七部富貴七話、第八部貧窮十二話、第九部事情（動作）九十八話、第十部東西（物品）百三十六話、計三百四十八話アルヲ以テ話題ハ多方面ニ亙リ、清文啓蒙ヤ清文指要ヤ清話百條ノ及ブ所デナク、滿洲語ヲ學ブ者ニハ無二ノ好讀本デアル。

上に言うように、本書の主要内容は全 348 話の教訓（滿洲語 *fe gisun* 「古い言葉」、即ち「成語」）を 10 部に分けて満漢対訳の形で記述したものである。叙述方式は独白体であり、一話ごとに題目が掲げられ、中国語では概ね「○○的」の形をとる。内容はほとんどが人生訓・処世訓の類であり、若い世代に対する叱責あるいは愚痴に類する話も随所に見られる。作者が序文の中で述べるところによれば、本書を編んだ目的は、古老の語る教訓という枠組を借りて年少者に滿洲語を学習させることにあったと思われる。

本書巻一の冒頭には、「序」(*sioi*)、「文法」(*gisun i kooli*)、「雑話」(*turgun forgošorongge*) という三種の文が収められており、「序」と「文法」は満文のみ、「雑話」は満漢対訳の形式を持つ。「文法」は滿洲語の発音体系に関する概説であり、Tawney (2007) にローマ字転写と英訳がある。「雑話」は「主」(*boigoji*) と「賓」(*antaka*) の対話によって構成される会話篇であり、会話の話者を明示するという点で当時としては類例のない体裁と言える（拙稿 2015 参照）。

管見の限り、『満漢成語對待』の現存版本には、聽松樓刊本、先月樓刊本、雲林堂刊本、二酉堂刊本、書肆不明刊本等がある。東京外国語大学図書館蔵（山本謙吾氏旧蔵本）の聽松樓刊本には漢字一字ごとに墨筆で滿洲文字による注音が書き込まれており、寺村政男（2008）はその情報も含め、本書の全文をローマ字に転写している。本稿は、寺村氏の先駆的業績に導かれつつ、校注及び日本語訳を付して、より利用しやすいテキストを読者に提供することを目的として作成したものである。

なお、「序」及び「文法」の部分については岸田文隆氏（大阪大学）に不明部分を尋ね、「雑話」の部分については陳曉氏（日本学術振興会外国人特別研究員）との読書会形式で積読を行った。ここに記して謝意を表したい。

<参考文献>

- 遠藤光暁・竹越孝主編（2011）『清代民國漢語文獻目録』，ソウル：學古房。
太田辰夫（1950）「清代の北京語について」，『中国語学』34：1-4；（1995）『中国語文論集 語学篇・元雜劇篇』90-97，東京：汲古書院；陳曉訳注，遠藤光暁校（2013）「論清代北京話」，『語言学論叢』48：352-368。
太田辰夫（1951）「清代北京語語法研究の資料について」，『神戸外大論叢』2（1）：

13-30.

竹越孝 (2015) 「這句台詞是誰說的？——近代以前東亞漢語會話教材的說話者標記」, 『神戸外大論叢』 65 (2) : 93-106.

竹越孝 (2017) 「《滿漢成語對待》——現存最早的清代滿漢合璧會話教材」, 『漢語史學報』 18 (待刊).

寺村政男 (2008) 『東アジアにおける言語接触の研究』, 東京: 竹林舎.

渡部薫太郎 (1932) 『増訂滿洲語圖書目録』, 大阪: 大阪東洋學會.

Fuchs, Walter von 1936 *Beiträge zur mandjurischen Bibliographie und Literatur*. Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.

Möllendorff, P. G. von 1892 *A Manchu Grammar, with Analyzed Text*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

Tawney, Brian 2007 *Reading Jakdan's Poetry: An Exploration of Literary Manchu Phonology*. M. A. thesis, Harvard University.

<使用版本>

1) 聽松樓本: 東洋文庫藏 (Ma2-5-8)

四卷四冊、冊大 22.8×15.0cm。第一冊 (卷之一) 62 葉、第二冊 (卷之二) 46 葉、第三冊 (卷之三) 52 葉、第四冊 (卷之四) 63 葉。封面左「manju nikan fe gisun be jofoho acabuha bithe」、中「聽松樓梓行」、右「滿漢成語對待」。卷頭題「manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithei uju debtelin 滿漢成語對待卷之一」。四周双辺、半葉の匡郭 19.2×12.6cm。版心は白口、上黒魚尾、魚尾の上に滿洲語で篇名、下に漢字で卷数と葉数。毎半葉七行、一行は左に滿洲語、右に中国語。

2) 先月樓本: 国立公文書館内閣文庫藏 (經 53-5)

四卷四冊、冊大 25.0×15.8cm。第一冊 (卷之一) 62 葉、第二冊 (卷之二) 46 葉、第三冊 (卷之三) 52 葉、第四冊 (卷之四) 62 葉。封面左「manju nikan fe gisun be jofoho acabuha bithe」、中「先月樓梓行」、右「滿漢成語對待」。卷頭題「manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithei uju debtelin 滿漢成語對待卷之一」。四周双辺、半葉の匡郭 19.1×12.8cm。版心は白口、上黒魚尾、魚尾の上に滿洲語で篇名、下に漢字で卷数と葉数。毎半葉七行、一行は左に滿洲語、右に中国語。

3) 二酉堂本: 大阪大学総合図書館蔵本 (Mn-380-66)

四卷四冊、冊大 24.7×15.0cm。第一冊 (卷之一) 62 葉、第二冊 (卷之二) 46 葉、第三冊 (卷之三) 52 葉、第四冊 (卷之四) 56 葉。封面上「新鑄滿漢必讀」、左「fe gisun be jofoho acabuha bithe」、中「二酉堂梓行」、右「成語對待」。卷頭題

「manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithei uju debtelin 滿漢成語對待卷之一」。四周双辺、半葉の匡郭 18.0×12.9cm。版心は白口、上黒魚尾、魚尾の上に満洲語で篇名、下に漢字で巻数と葉数。毎半葉七行、第四冊のみ八行、一行は左に満洲語、右に中国語。

4) 雲林堂本：天理大学附属天理図書館蔵 (829.44-165)

四卷四冊、冊大 25.5×16.8cm。第一冊（卷之一）62 葉、第二冊（卷之二）46 葉、第三冊（卷之三）52 葉、第四冊（卷之四）56 葉。封面上「新鐫滿漢必讀」、左「fe gisun be jofoho acabuha bithe」、中「雲林堂梓行」、右「成語對待」。卷頭題「manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithei uju debtelin 滿漢成語對待卷之一」。四周双辺、半葉の匡郭 18.0×13.0cm。版心は白口、上黒魚尾、魚尾の上に満洲語で篇名、下に漢字で巻数と葉数。毎半葉七行、第四冊のみ八行、一行は左に満洲語、右に中国語。

5) 書肆不明刊本：明治大学図書館蔵 (WKE10-03-15-H)

四卷四冊、冊大 28.9×18.8cm。第一冊（卷之一）54 葉、第二冊（卷之二）42 葉、第三冊（卷之三）45 葉、第四冊（卷之四）55 葉。封面なし、卷頭題「manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithei uju debtelin 滿漢成語對待卷之一」。四周双辺、半葉の匡郭 18.9×15.1cm。版心は白口、上黒魚尾、魚尾の上に満洲語で篇名、下に漢字で巻数と葉数。毎半葉八行、一行は左に満洲語、右に中国語。

<凡例>

- ・ 本稿は、『滿漢成語對待』の現存諸本を校合するとともに、満洲文字をローマ字に転写し、日本語で逐語訳を付した資料である。
- ・ 以下では聴松樓本を底本とし、先月樓本、二酉堂本、雲林堂本、書肆不明本との異同を注記する。
- ・ 本文においては、中国語文のまとまり及び満洲語文の句点（本稿ではこれを「。」で表す）ごとに改行した上で（両者がずれる場合は中国語文のまとまりを優先する）、話の番号と句の番号を掲げ、満洲語文の翻字、満洲語文の逐語訳、中国語文の翻字の順に示す。また、末尾の（ ）内にはその部分の出処を巻・葉・表裏の順で記す。
- ・ 満洲文字の翻字は Möllendorff 式による。
- ・ 漢字は原則として原文のままの字体を用いるが、一部の異体字・俗字は通用の字体に改める。

- manju nikan i fe gisun be jofoho acabuha bithei uju debtelin.. (一 1a1)
 満洲語 中国語 の 古い 言葉 を 繋いで 合わせた 書物の 第一 卷
 満漢成語對待卷之一
 sioi (一 1a2)
 序文
 序
- S-1 manju kai. (一 1a3)
 満洲人 なのだぞ
- S-2 wesihun jalan i manju ofi. (一 1a3)
 当 代 の 満洲人 なのだから
- S-3 manjurame bahanarakū oci. (一 1a3-4)
 満洲語を話すこと できなく ても
- S-4 adarame dubentele gisurerakū de wajici ombini. (一 1a4)
 どうして 最後まで 話さない で 終わること できるか
- S-5 we cihangga gisun de gūtubume aldasi niyalma oki sembi. (一 1a5)
 誰が 望んで 言葉 により 辱められ 未熟な 人間 になろう と思うか
- S-6 beyei bisire akū i šumin micihyan be weri de kemnebume. (一 1a6-7)
 自身の 有 無 や 深い 浅い を 別人 に 計量され
- S-7 golmin foholon be gūwa de miyalibumbi. (一 1a7)
 長い 短い を 他人 に 測られる
- S-8 gese adali banjifi ilgabume sitara serebume isirakū ohode. (一 1a7-1b2)
 同じ 様に 生きて 区別され 遅れを 知られて 及ばなく なった時
- S-9 uthai wesihun kesi simen sain fiyanji daniyan bikini. (一 1b2-3)
 そこで 尊い 恩 沢や 良い 庇 護が あればよいが
- S-10 beye ojarahū de inu uju lasihibure. (一 1b3)
 自身が できない 時 また 首を 振られ
- S-11 falanggū alibure dabala. (一 1b3-4)
 手で 張られる だけだ
- S-12 ai baita. (一 1b4)
 何たる 事か
- S-13 tuttu se unde. (一 1b4)
 そこで 歳が いかず
- S-14 eiten tacin jabdure onggolo be amcame. (一 1b4-5)
 すべての 教えが きちんとする 前 に 乗じて
- S-15 daci gisurehei jihe fe gisun be durun obume bufi. (一 1b5-6)
 元から 話して 来た 昔の 言葉 を 見本 として 与え

- S-16 turgun forhošobume tacibumbi. (一 1b6)
会 話させて 学ばせる
- S-17 gisun fe be wesihulerengge. (一 1b7)
言葉は 昔を 尊ぶもの
- S-18 emgeri niyalmai gūnin de singgehe. (一 1b7-2a1)
既に 人の 心 に 染み込み
- S-19 šan de šungkengge. (一 2a1)
耳に 通じたもの
- S-20 ulhire de nohai ja. (一 2a1)
理解するの に とても 容易だ
- S-21 erebe songkolome alhūdarakū. (一 2a1-2)
これを 真似て 手本とせず
- S-22 gisurefi¹ donjire niyalma be baibi yasa faha kat kat aššabume. (一 2a2-3)
話し 聞く 人 に対しただ 眼 玉を きよろ きよろ 動かし
- S-23 šame tuwame bekterebuci gūnin i jorin be. (一 2a3-4)
眺め 見て 啞然とさせるなら 考え の 意図 を
- S-24 ainaha ufaraburakū ome mutembi. (一 2a4)
どうして 誤らない こと できるか
- S-25 mujilen be tuwara. (一 2a5)
心 を 見て
- S-26 temgetulerengge. (一 2a5)
証拠とすることは
- S-27 gisun de akdahabi. (一 2a5)
言葉 に 頼っている
- S-28 uthai sejen de heru fahūn be akū obuci ojorakū. (一 2a6)
即ち 車 に 輻や 籬 を なく すること できず
- S-29 farhūn de tolon tuwa be tukiwere adali. (一 2a7)
闇 に 松明の 火 を 掲げる 様なもの
- S-30 urunakū yaya onggolo gisun be urebume gamahai. (一 2a7-2b1)
必ず 諸々の 以前の 言葉 を 復習して 保持したまま
- S-31 ini cisui angga ici eyeme banjinaha manggi. (一 2b1-2)
自然と 口 に応じて 流れて 生じてきた ならば
- S-32 teni baita turgun² be yarubumbi. (一 2b2-3)
やっ と 物事の 意味 が 導かれる
- S-33 doihonde umai gisun be belheme urebufi sindarakū. (一 2b3-4)
予め 全く 言葉 を 準備し 復習して 心に留めず

- S-34 jihe baita turgun³ be deng seme ilibufi. (一 2b4)
 出て来た 物事の 意味 を ぐっ と 押し止め
- S-35 teni yarubure gisun be tamin acabume baime seoleci. (一 2b5)
 やっと 導かれる 言葉 を 逆 向きに 求めて 思案するなら
- S-36 taka baharakū de sitaburakū ojoro aibi. (一 2b6)
 しばらく できない 時 遅れずに いられる ものか
- S-37 manju gisun i amba muru kengse dacun. (一 2b6-7)
 満洲 語 の 大きな 道理は 果断で 鋭利だ
- S-38 getuken tomorhon turgun baktambure sain. (一 2b7-3a1)
 正確に 明晰な 意味を 入れるのに 良い
- S-39 duibulen goicuka. (一 3a1)
 対比は 道理がある
- S-40 mudan i urgen fe. (一 3a1-2)
 音 の 区別は 古い
- S-41 ujen weihuken boljonggo de wajihabi. (一 3a2)
 重い 軽いは 規則的 に 発音している
- S-42 jaka de arbun bifi sabumbi. (一 3a2-3)
 物 に 姿が あって 見える
- S-43 baita de jilgan bifi donjimbi. (一 3a3)
 事 に 声が あって 聞こえる
- S-44 yasa šan de bakcilabuhangge. (一 3a3-4)
 眼と 耳 に 対応するものは
- S-45 baita jaka ofi. (一 3a4)
 事と 物 なので
- S-46 acinggiyame acabure de tumen kūbulin tucinjimbi. (一 3a4-5)
 動かし 合わせる 時 一万の 変化が 生じる
- S-47 aikabade gisun be la li i ten de isiburakū ohode⁴. (一 3a5-6)
 もしも 言葉 を 機敏に 高みに 到らせない ならば
- S-48 adarame mujilen i surei sasa tengneme teherefi. (一 3a6-7)
 どうして 心 の 聡明さ と 比べて 釣り合い
- S-49 tang seme tookan akū oci ombi. (一 3a7-3b1)
 すらすら と 滞りが ない こと できるか
- S-50 mujilen i sure serengge. (一 3b1)
 心 の 聡明さ というものは
- S-51 banitai banin. (一 3b1)
 本 質

- S-52 gisun hese serengge. (一 3b1-2)
言 葉 というものは
- S-53 niyalmai hūsun. (一 3b2)
人の 力
- S-54 sitaha de gisun baharakū be tuwame. (一 3b2-3)
遅れた 時 言葉が できないの を 見て
- S-55 eici dursuleme duibulere. (一 3b3)
或いは 真似て 比べる
- S-56 akū oci teodenjeme sidehunjere. (一 3b3-4)
そうでない ならば 交換して 間をあける
- S-57 waka oci erebe jorime terebe forire. (一 3b4)
違う ならば これを 指し あれを 打つ
- S-58 uttu faksikan i gamarakū oci. (一 3b4-5)
この様に 巧みに 処理しない ならば
- S-59 hefeliyehe tongga gisun. (一 3b5)
懐に収めた 数少ない 言葉を
- S-60 aide mujilen surei sasa forgošoro de acabume mutembi. (一 3b5-6)
どうして 心の 聡明さと 共に 会話 に 合わせること できるか
- S-61 mangga urse safi. (一 3b6-7)
立派な 人々は 知っていて
- S-62 inenggidari nonggibume. (一 3b7)
毎日 上達し
- S-63 erindari nemebucibe⁵. (一 3b7)
折に触れ 増やしても
- S-64 hono baitalara de tesubuci ojarahū bade. (一 4a1)
なお 使う 時 満足に できない のに
- S-65 hūsun cinggiya. (一 4a1-2)
力が 足りず
- S-66 gūnin jai jecuhuri oci. (一 4a2)
考えが また ふらつく ならば
- S-67 ai tuwara babi. (一 4a2)
何の 見る 所があるうか
- S-68 ememu gūnin tesufi. (一 4a3)
或る 考えは 足りていて
- S-69 gisun tesurakūngge bi. (一 4a3)
言葉が 足りない者が いる

- S-70 terei nimeku. (一 4a3-4)
彼の 弱点は
- S-71 hūsun cinggiya ofi. (一 4a4)
力が 足りない ため
- S-72 duibuleme teodenjere de tacin akū ofi kai. (一 4a4-5)
比べて 交換する 時 教えが ない から だぞ
- S-73 ememu gisun tesufi. (一 4a5)
或る 言葉は 足りていて
- S-74 gūnin tesurakūnge bi. (一 4a5-6)
考えが 足りない者が いる
- S-75 terei nimeku. (一 4a6)
彼の 弱点は
- S-76 hūsun tesufi. (一 4a6)
力は 足りていて
- S-77 gūnin hafu akū ofi kai. (一 4a6-7)
考えが 一貫して いない から だぞ
- S-78 ememu gūnin gisun sasa tesukengge bi. (一 4a7-4b1)
或る 考えと 言葉が 共に 足りた者が いる
- S-79 tuttu ohongge. (一 4b1)
その様に なった者は
- S-80 hūsun akūmbufi wembume hūwaliyambuha ofi kai. (一 4b1-2)
力を 尽くして 改善し 調和させた から だぞ
- S-81 damu gisureme toktoho fe gisun be jafafi kimciha de. (一 4b2-3)
ただ 話して 定まった 古い 言葉 を 取って 調べた 時
- S-82 nenehe ferguwecuke. (一 4b3)
昔の 素晴らしさ
- S-83 tei moco ba ilihai serebume tuyembumbi. (一 4b3-4)
今の 拙い 所は すぐに 気づかされ 明らかになる
- S-84 cingkai giyalabuha be sarkūde. (一 4b4)
遠く 隔たっているの を 知らないと
- S-85 hūhuri fengšen de nikebufi. (一 4b4-5)
幸 福 に 甘えて
- S-86 gajime jihengge de obumbi. (一 4b5)
生まれ持って 来たもの に する
- S-87 gerilaha manggi. (一 4b5-6)
少し見た ならば

- S-88 ainaha gemu fe gisun i kooli songkoi. (一 4b6)
 どうして すべて 古い 言葉 の 道理 に従って
- S-89 hing seme urebuhei mutebuhengge waka ni. (一 4b6-7)
 一心 に 復習して できたもの でない のか
- S-90 erebe tuwaha de. (一 4b7)
 これを 見た 時
- S-91 gisun i cala boobai akū. (一 5a1)
 言葉 の 彼方に 宝物は なく
- S-92 hūsun ci tulgiyen muteburakū be saci acambi. (一 5a1-2)
 力 以 外では できないの を 知る べきだ
- S-93 tacirengge. (一 5a2)
 学ぶことは
- S-94 unenggi baita obufi amcadame facihiyašaci. (一 5a2-3)
 真の 事を行って 何とか 努力するのなら
- S-95 tebke tabka be aisehe. (一 5a3)
 よちよち 歩き を どう思うのか
- S-96 goidaha de inu keleng kalang ni nikedembi. (一 5a4)
 時間がたった 時 も のそり のそり と 何とかできる
- S-97 ai hendume. (一 5a4-5)
 何をか 言わんやだ
- S-98 dere tokome weihukelebure. (一 5a5)
 顔を 指して 軽んじられ
- S-99 fisa jorime jubešebumbi. (一 5a5)
 背中を 指して 悪口を言われる
- S-100 mafari akafi pek⁶ sehe. (一 5a6)
 祖先達が 嘆いて はあ と言って
- S-101 sakdasa wancafi⁷ waliyaha sehengge ai gūnin. (一 5a6-7)
 老人達が 怒って 駄目だ と言ったことは どんな 考えか
- S-102 inu salijan i muse manju ofi. (一 5a7)
 また 普通 の 我々 満洲人 なのだから
- S-103 koro sehebe si aisebi. (一 5b1)
 恨み言 言ったのを 君は どう思うか
- S-104 manju waka oci. (一 5b1)
 満洲人 でない ならば
- S-105 we ai halambaha. (一 5b1-2)
 誰が 何を 改めさせたのか

S106 tede ai dalji.. (一 5b2)

そこに 何の 関わりがある

[待続]

¹ gisurefi : 雲林堂本は hisurefi に作る。

² turgun : 雲林堂本は turhun に作る。

³ turgun : 雲林堂本は turhun に作る。

⁴ ohode : 先月樓本は ogode に作る。

⁵ nemebucibe : 二酉堂本は以下の第4葉 (S63~90) を欠く。

⁶ pek : 二酉堂本は pei、雲林堂本は pak に作る。

⁷ wancafi : 二酉堂本・雲林堂本・書肆不明本は fancafi に作る。